薄雲巻の天変

―桐壺院の遺言不履行のゆくえ―

望月郁子

内容

一　はじめに
二　冷泉の夜居の僧都による天変の解釈と対応
三　「内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける」
四　帝冷泉の苦悩と光の格上げ
五　女三宮の結婚―光による朱雀の後見

一　はじめに

右大臣・弘徽殿による恐惶政治は終わった。光帰京の翌年二月、春宮（冷泉）は数え年十一で元服、同二十余日朱雀の譲位にともない即位する。承香殿腹の朱雀の第一皇子が春宮となる。光は内大臣になる。明石姫君誕生。光は、宿曜の予言が的中する現実に、高麗の相人の予言を重ねて「相人の言空しからず（澪標［四］）」と、自らの将来を皇位につくこと

はないと再認識する。

光が三二歳になった年、天変がおこる。

「その年、おほかた世の中騒がしくて、公ざまに物のさとししげく、のどかならで、天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろく事多くて、道々の勘文ども奉れるにも、あやしく世になべてならぬことどもまじりたり。内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける。（薄雲［一二］）」

太政大臣（桐壺の左大臣）が他界。三月には藤壺が三十七歳で亡くなる。更に式部卿宮（桐壺帝弟・朝顔の父）も亡くなる。世代交代の年の感が強い。新しい世代の幕開けを冷泉が担っている。

泰平の世に起こったこの天変を、何のさとしと見るべきかが問題である。従来、一般に是認されてきた解釈を検討し、物語の真相に迫りたい。更に、この天変が以後の物語に何をもたらすことになるのかも考察しなければなるまい。

二　冷泉の夜居の僧都による天変の解釈と対応

［二1］（冷泉の出生の秘密の奏上）故藤壺に仕え、今は冷泉の夜居をつとめる僧都が、天変を「…（冷泉帝が）知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるること（［一五］）」へのさとしと解釈し、僧都の知る冷泉出生の秘密を奏上する。物語はそのくだりを長々と語る。

僧都は、「仏天の告げあるによりて奏しはべるなり」と前置きして、藤壺懐妊当時から「御祈禱」を依頼され、光の須磨退去中重ねて「御祈禱」を承り、冷泉即位まで続けた。

「なにがしと王命婦とよりほか、このことのけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬはこの気なり。…」

という。

冷泉即位の実現を、僧都は自分のした「御祈禱」の力であると信じきっているらしい。僧都はもともと藤壺の母后方の存在である。故桐壺院・光方の存在ではない。故院・光に対する理解が深く、尊敬が厚ければ、故院・光に大事を任せ、自重するのが普通ではないか。藤壺が沈黙を守って亡くなったことも尊重されてよさそうなものである。僧都にはそれができない。宿曜の予言は知るべくもない。藤壺亡き今、「知ろしめさぬ」全責任が自分にあると意識し、天眼を恐れて、言い換えれば、我が身に懸かる罪を恐れての秘密の露呈という一面が感じられる。

従来、この僧都による天変の解釈と対応を、そのまま是認する読みが続けられてきたようである。しかし、天変のさとしが仮に僧都の解釈どおりであるとすれば、天変当時生存していた入道后の宮（藤壺）に、女性であるとはいえ、通じないとは言い切れまい。

そもそも、本文は、

「内大臣（光）のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける。」

である。この本文は、天変の真意は、光一人だけにしか通じないというのである。ということは、僧都には理解できないと読むのが自然な読み方ではないか。

［二2］（故帝桐壺による罪の償い）僧都の「御祈禱」が効果がなかったというのではないが、冷泉の即位に決定的な働きをしたのは、桐壺院の亡霊であった。

冷泉の誕生は、帝桐壺が宿曜の予言〈（光には）御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。…（澪標［四］）〉に導かれて、若い光と藤壺をリードして成ったことであり、帝桐壺・光・藤壺三者三様の《絶対矛盾》とでもいうべき受難であった。従来の解釈〈光と藤壺との密通〉で片付くことではない。(1)

須磨の天変で光の夢に顕れた桐壺院の亡霊は、

「…これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、…（明石［三］）」

という。「おのづから」の「犯し」は、宿曜の予言の顕現化に必要不可欠な犯し、即ち〈ただ人〉光の子（母藤壺）を帝桐壺が春宮に立て〈帝〉にしようとしていることである。「その罪を終ふるほど暇なくて」は、故桐壺院が「犯し」の罪の償いに専心したことをいう。《絶対矛盾》の責任者である故桐壺院が罪を終えて、はじめて、冷泉の即位が実現されたと見るのが自然であろう。それは同時に光・藤壺二人の許されでもあった。

光も須磨で祈りに撤し、海龍王の試練を受け、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」と、故院に導かれて、難を脱した。[2] 光自身の努力もさることながら、故院による罪の償いによって、光の帰京・政界復帰も実現したのであろう。

藤壺は出家し孤独に撤し、故院の遺言、即ち冷泉の即位実現をひたすらに祈った。

ちなみに、藤壺との問題の罪についての、帰京後の光の意識であるが、

「（秋好への執心をセーブしながら）…恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへのすき（藤壺への思い）は、おもひやり少なきほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん（薄雲［二〇］）」

と、仏神の許しは過去（須磨脱出時点か）に得たと、光は思っている。これは同時に、藤壺の罪の許されでもあった。

［二3］（僧都の奏上のもたらしたもの）上述のごとくであるとなると、夜居の僧都の冷泉への秘密の奏上は、取り返しのつかない大きな過失となる。ことを知った光が、

「故宮（藤壺）の御ためにもいとほしう、また、上（冷泉）のかく思しめし悩めるを見たてまつりたまふもかたじけな

きに（薄雲［一八］）」

というとおり、藤壺は救われず、帝冷泉の苦悩とそれを後見として見守る光の新たな苦しみが始まることになる。

宿曜の予言を知らない藤壺は、最期を見舞った冷泉の還幸の後、

「上（冷泉）の、夢の中にも、かかることの心を知らせたまはぬを、さすがに心くるしう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすぼほれたることに思しおかるべき心地したまひける。（薄雲［一二］）」

と、秘密を封じ通して終わった。ということは責任を自分で負って冷泉を救う、捨身の覚悟の強さを意味する。

物語は、藤壺の死を惜しんで、

「かしこき御身のほどと聞こゆる中にも、御心ばへなどの、世のためにもあまねくあはれにおはしまして、豪家にこと寄せて、人の愁へとあることなどもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕へまつることをも、世の苦しみとあるべきことをばとどめたまふ。功徳の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人など、昔のさかしき世にみなありけるを、これはさやうなることなく、ただもとよりの財物、えたまふべき年官、年爵、御封のものの、さるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをしおかせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。（薄雲［一四］）」

という。藤壺は公人〈入道后の宮〉として潔癖・清潔に生きた。

であったにもかかわらず、後に、光の夢に顕れた藤壺は、

「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ（朝顔［一〇］）」

と僧都による露呈の結果、地獄の苦を受けていることを光に訴える。夢の後、光は、

「さとはなくて、所どころに御誦経などせさせたまふ。「苦しき目見せたまふと恨みたまへるも、さぞ思さるらんかし。行ひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つ事（秘密が冷泉に知られたこと）にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」と、ものの心を深く思したどるに、いみじく悲しければ、「何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえに参でて、罪にもかはりきこえばや」などつくづくと思す。かの御ためにとりたてて何わざをもしたまはむは、人咎めきこえつべし。内裏にも、御心の鬼に思すところやあらむ、と思しつつむほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。おなじ蓮にとこそは（であって当然なのに）、

なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ

と思すぞうかりけるとや。（同上）」

と、亡き藤壺を救えない今の自分の無力と死後の光自身の苦しみを先取りして悲しむ。(3)

三　「内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける」

［三1］（天変の諭し解明の鍵）天変をリードしているのが故桐壺院であるとすれば、天変を解く上での鍵となるのは、故院の遺言の履行不履行ではないか。

前に戻るが、薄雲巻では、天変に続いて、藤壺の重態と崩御が語られる。臨終を見舞う光に藤壺が言う最期の言葉は、

「院の御遺言にかなひて、内裏（冷泉）の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しく」

であった。これは、光が故院の遺言どおりに冷泉の御後見をしたことに対する藤壺の礼である。と同時に、物語の読者に、故院の遺言を想起させる作者のヒントではないか。

［三2］（桐壺院の遺言）故院の臨終を見舞った朱雀帝に、桐壺院は、

「春宮（冷泉）の御事を、かへすがへす聞こえさせたまひて、次には大将（光）の御事、「はべりつる世（桐壺院生存中）に変らず、大小のことを隔てず何ごとも（光を）御後見と思せ。（光は）齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」…（賢木［八］）」

と遺言した。その真意は、光を桐壺院に替わる後見として、政治を任せなさい、つまり、光に政治の実権を握らせなさいであり、右大臣・弘徽殿に従うなである。

［三3］（父の遺言に対する朱雀の理解）桐壺院崩御を境に、故院の悲願に反して、弘徽殿・右大臣による恐惶政治の世となり、周知のように、光は朧月夜との関係を理由に官爵を剝脱され、政界から締め出されて、須磨に退去した。朱雀帝としては、故父院の遺言不履行に終始せざるを得なかったのであるが、問題は、肝心の朱雀がその事実をどう意識しているかである。

手がかりとなりそうな本文に次の①～③がある。

①院崩御の翌年の秋、光は朱雀と面談したが、帝朱雀は政治の話は一切出さず、

「東宮（冷泉）をば今（朱雀）の皇子になしてなど（故院が）のたまはせおきしかば…（賢木［二三］）」

と、宿曜の予言の顕現化をめざす故院が言うはずのないことを言う。遺言が真っ当に理解されていない。

②光帰京後、

「大后（弘徽殿）、御悩み重くおはしますうちにも、つひにこの人（光）をえ消たずなりなむことと心病み思しけれど、帝（朱雀）は院の御遺言を思ひきこえたまふ。ものの報い（光の政界からの追放に対する報い）ありぬべく思しけるを、

なほし立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。（澪標［一］）」

光を政界復帰させれば「御心地涼し」という朱雀である。「御遺言を思」っても、故院の真意、〈光を後見とし、光に従って政治をせよ〉、を一切無視しなければならなかったことに対する自覚は皆無に等しい。

③宮中で絵合があると聞き、朱雀は梅壺（前斎宮）に、〈別れの櫛〉の儀式を画かせた絵を贈った。

「院の帝（朱雀院は、梅壺の返歌を）御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思しける。大臣（光）をもつらしと思ひきこえさせたまひけんかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ（絵合［七］）」

前斎宮の冷泉への入内を、地の文であるが「過ぎにし方の御報い」かという。「過ぎにし方」は光の政界からの追放であるが、それに対する朱雀の意識が朧月夜問題以外の何物でもないことが示唆されている。

［三4］（天変の諭しの意味）薄雲巻の天変は、「内大臣のみなむ、御心の中にわづらはしく思し知ることありける。」と、そのさとしは実は光一人にしか通じなかった。通じた光は「わづらはし（相手ニナルノガ面倒ダ）」と感じている。

須磨退去に際し、光は、政界から締め出されたことを「みづからのおこたり（須磨［二］）」と自省した。「おこたり」とは、帝朱雀の政治の後見を故院の遺言通りにしようにも、弘徽殿・右大臣に政治を牛耳られて、一切できなかったことを指す。(2)

冷泉が即位し、光が政界復帰して、世の泰平が保てていても、光には、朱雀在位中に「後見」ができず、故父院の遺言が履行されずに今に至っていると意識されていた（後述［五1］）。

当該の天変のさとしが、光がその政治能力を十二分に発揮していないことにかかわるとすれば、光が「わづらはし」と受けとめて自然であろう。これは、光以上に、光を後見としなかった朱雀の問題である。朱雀に故院の遺言の真意が通じていないことは、光には判っている（前述［三3］①）。朱雀には天変のさとしは通じない。光の「わづらはし」は自身の

こととしてのそれと、兄朱雀のこととしてのそれとの双方に渉る。

四　冷泉の苦悩と光の格上げ

［四1］（出生の秘密を知った帝冷泉の対応）僧都の奏上を聞いて、

「上（冷泉）は、夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて、いろいろに思し乱れさせたまふ。故院の御ためもうしろめたく、大臣（光）のかくただ人にて世に仕へたまふもあはれにかたじけなかりけること、かたがた思し悩みて、日たくるまで出でさせたまはねば、かくなむと聞きたまひて、大臣も驚きて参りたまへるを御覧ずるにつけてもいとど忍びがたく思しめされて御涙のこぼれさせたまひぬるを、（光は故母宮を慕っているのかと思う）（薄雲［一六］）」

時に帝冷泉は十四歳（数え年）。故桐壺院・光のそれぞれに対し自分はどうすべきか苦しむ。光の前で涙をこぼす若い帝を案じて、光は付き添って、話の相手をつとめる。冷泉が譲位をほのめかすのを、光は「いとあるまじき御事なり」と抑える。冷泉は事を光に感付かせたいと思うが、口にも出せず、「うちかしこまりたまへるさまにていと気色ことなるを、かしこき人（光）の御目にはあやしと見たてまつりたまへど」冷泉が出生の秘密を知ったとは光も思いもしなかった。

冷泉は王命婦に聞きたいと思ったが、知ったと命婦に感付かれてはならないと自制し、自分のような先例の有無を光に聞きたいと思ったが、その折もない。自分で中国・日本の諸文献（史書類であろう）を調べた。中国では「乱りがはしきこと」が多いが、日本の先例は見当らない。秘すべきことを書き残すはずもないと悟る。「一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位に即きたまひつるもあまたの例あり」と気が付いた。「さもや譲り聞こえまし」と心に決め、方法を熟慮する。

秋の京官任命の原案に光を太政大臣とし、原案を光に見せるついでに、譲位の意向を漏らす。光は、

「故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中にとりわきて思しめしながら、位を譲らせたまはむことを思しめし寄らずなりにけり。何か、その御心あらためて、及ばぬ際には上りはべらむ。ただ、もとの御掟のままに、朝廷に仕うまつりて、いますこし齢重なりはべりなば、のどかなる行ひに籠りはべりなむと思ひたまふる（薄雲［一八］）」という。光は故桐壺院の「御掟」の厳守に撤している。光にとって故父院は絶対である。当該の光のものいいを物語は「常の御言の葉」という。語り手の敬意表現である。

公卿詮議で光の太政大臣昇進が決まった。光が固辞したが、位は太政大臣なみにし、牛車の宣旨を下した。冷泉は光を皇位継承権のある〈親王〉にと主張するが、光は承知しない。ちなみに、光が内大臣の地位を大将（旧頭中将）に譲り、太政大臣昇進を受け入れるのは、斎宮女御（秋好）立后以後である（少女［八］）。

以上、若年の帝冷泉の自立ぶりと「親王」になるのを拒否する光の徹底ぶりとが見事である。

一方、朱雀はであるが、二年後の「二月二十日あまり」の朱雀院への行幸のくだりをあげたい。

院の御所での春鶯囀の舞に、桐壺の代の南殿の花宴を思い出す。朱雀院が「またさばかりのこと見てんや」という。舞が終わって杯となり、故院の皇子四人が歌を詠む。

「鶯のさへづる声はむかしにてむつれし花のかげぞかはれる　（光）

九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくる鶯の声　（朱雀院）

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ変らぬ　（兵部卿宮）

鶯のむかしを恋ひてさへづるは木伝ふ花の色やあせたる　（帝冷泉）」

行幸の場であるから、先例を讃え、今上を立てるのが普通であろう。「故父院の南殿の花の宴の折と鶯の声は変らない、この院の御所でも」と光が祝うのを承けた、朱雀の歌は、譲位後の淋しさをにじませて私的感慨に終わる。弟の兵部卿宮が

「むかし」の花の宴を「いにしへ」と切り返し、今に伝わる楽も鳥の音も「変らぬ」と今を讃える。若年の帝冷泉は、「むかしを恋ひて」と桐壺を賛美し、「花の色やあせたる」と謙遜する。なお、「木伝ふ」の「こ」に「子」を懸けたか。冷泉の高さが光る。

四人の歌に続けて物語は、「これは御私ざまに、内々のことなれば、あまたにも流れずやなりにけん、また書き落としてけるにやあらん。（少女［二九］）」という。朱雀に、公人としての意識と感覚の欠如がはなはだしい。

［四2］（光、準太上天皇となる）歳月が流れ、明ければ光が四十歳になる年の秋、

①「太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ。…かくても、なほ飽かず帝（冷泉）は思しめして、世の中を憚りて位をえ譲り聞こえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりけり。（藤裏葉［一二］）」

②十一月二十日あまりに、六条院に行幸がある。朱雀院も参加。

「御座二つよそひて、主（光）の御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝（冷泉）はなほ限りあるゐやゐやしさを尽くして見えたてまつりたまはぬことをなん思しける（藤裏葉［一五］）」

冷泉が命じて、光・朱雀院・冷泉帝三人の席を同列にさせた。

西日に陰影が映える時刻に、楽・舞となる。聖帝桐壺の朱雀院の紅葉の賀が思い出される。光の太政大臣（旧頭中将）への歌

「色まさるまがきの菊もをりをりに袖うちかけし秋を恋ふらし」

に、太政大臣は

「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る時こそありけれ…」

と光を「にごりなき世の星」と讃える。

「上の御遊びはじまりて、…御前にみな御琴どもまゐれり。宇陀の法師の変らぬ声も、朱雀院は、いとめずらしくあはれに聞こしめす。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉のをりをこそ見ね

恨めしげにぞ思したるや。帝、

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせたまふ。（藤裏葉［一六八］）」

ここでも朱雀一人が私的感情―太政大臣も自分を立ててくれない―に引かれて、〈院〉として亡父桐壺の先例を讃える祝賀の歌が詠めない。故院に対する朱雀の意識に問題がありそうでもある。

［四3］（冷泉の役割）朱雀の問題は更に後述するとして、冷泉にしぼれば、以上、夜居の僧都より秘密を知らされた帝冷泉の光への要求「譲位」に対し、桐壺院の「御掟」を厳守して応じない光の、冷泉による〈格上げ〉である。これは、結果としては、朱雀が在位中に桐壺院の遺言を守っていれば、そうすべきであったことではなかろうか。とすれば、冷泉は、朱雀がやるべくしてやらなかったことを実現するという役割を担ったとなる。

五　女三宮の結婚―光による朱雀の後見

［五1］（夕霧が光の使者として朱雀を見舞う）

「朱雀院の帝、ありし（六条院への）御幸の後、そのころほひより、例ならずなやみわたらせたまふ。（若菜上［一］）」

年末には、かなり悪化し、御簾の外にも出ない。光もしばしば見舞いの使者を送る。

「中納言の君（夕霧）参りたまへるを、御簾の内に召し入れて、御物語こまやかなり。「故院の上（桐壺）、いまはのき

ざみに、あまたの御遺言ありし中に、この院（光）の御事、今の内裏（冷泉）の御事なむとりわきてのたまひおきしを、おほやけとなりて、事限りありければ、内々の心寄せは変らずながら、はかなき事のあやまりに心おかれたてまつることもありけむと思ふを、年ごろ事にふれて、その恨み遺したまへる気色をなむ漏らしたまはぬ。…内裏の御事は、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ、本意のごと、いとうれしくなむ。この秋の行幸の後、いにしへのことと り添へて、ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ。対面に聞こゆべきことどもはべり。かならずみづからとぶらひものしたまふべきよし、もよほし申したまへ」など、うちしほたれつつのたまはす。」

朱雀は、冷泉については「かの御遺言違へず」即位させたからいいとし、光については、光が官爵を剝脱され須磨に退去したことについて、帝であった自分を心底どう思っているのか、又、六条院行幸後、「いにしへのことと り添へて、ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ」という。

六条院行幸後云々は、行幸の際、冷泉が、光の席を、帝（冷泉）・院（朱雀）と同列に直させた一件である。朱雀にしてみれば、光は親王（皇位継承権所有者）ではない、準太上天皇としても「準」だから、朱雀と同列ではあり得ないのではないか。「いにしへ（記憶ニ残ッテイナイ、アイマイナ過去）」に取り決めがあったのか、「ゆかしく（知リタイ）」「おぼつかなく（実状ガワカラナイノデ不安ダ）」ということである。

朱雀のことばを承けて夕霧は、なにかのついでにも光が「いにしへの愁はしきことありてなむなど」打ち明けて言うことはないと前置きして、光の心中を、

「かく（周知のように）朝廷の御後見を仕うまつりさして（官爵を剝脱されて）、静かなる思ひをかなへむと（仏道に専心したいと）、ひとへに籠もりゐし（須磨退去）後は、何ごとをも知らぬやうにて、故院の御遺言のごともえ仕うまつら

ず、御位におはしましし世には、齢のほども、身の器物も及ばず、賢き上の人々（弘徽殿・右大臣など）多くて、その心ざしを遂げて御覧ぜらるることもなかりき。(4) 今、かく政を避りて、静かにおはしますころほひ、心の中をも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となくところせき身のよそほひにて、おのづから月日を過ぐすこと」となむ、（光が）をりをり嘆き申したまふ」など奏したまふ。（若菜上［三］）」

という。留意すべきは「朝廷の御後見を仕うまつりさして（途中デヤメテ）…ひとへに籠もりゐし後は…故院の御遺言のごともえ仕うまつらず…」である。

故院は朱雀に、「はべりつる世に変らず、大小のことを隔てず何ごとも（光を）御後見と思せ…」と遺言した（前述［三2］［三3］）。光は須磨退去を余儀なくされた。朱雀も光も故父院の遺言不履行のままである。それに対し、光は自責の念を持ち続けているが、朱雀には父院の遺言の真意が通じていない。薄雲巻の天変のさとしの真意が通じたのは光一人であり、光は天変のさとしを「わづらはし」とした（前述［三4］）。故院の遺言を朱雀に判らせなければならない、遺言不履行のまま終わられては朱雀の立場がない。「故院の御遺言のごともえ仕うまつらず」は、病身の朱雀に、夕霧を介して、ことを判らせようとする光の誠意をこめた訴えである。夕霧の「をりをり嘆き申したまふ」は、当該の問題に対する光の真摯さを示唆する。

「故院の御遺言のごともえ仕うまつらず…」と光が言うと聞いても、それが同時に自分の問題でもあるとは朱雀は受けとめないらしい。光独りのこととされてしまうのか。夕霧をじっと見つめて、女三宮の後見にと思いはじめ、朱雀の話題は夕霧の身辺のことに移り、

「太政大臣のわたりに、今は、住みつかれたりとな。年ごろ心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふことこそあれ」

と夕霧に直接いきなり言う朱雀である。六条院行幸の際の不審も霧散して、意識は女三宮の後見者問題以外はなきがごとくとなる。夕霧は、「はかばかしくもはべらぬ身には、寄るべもさぶらひがたくのみなむ」とだけ言って院を去る。

［五2］（朱雀の婿選び）夕霧が帰った後、夕霧、更に光を賛美する女房達と共に、朱雀は二人を褒めて長々と語り、光よりも夕霧の方が出世が早いと言う。

女三宮の「おとなしき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたまはするついでに」光が紫を育てたように、三宮を育てる人を求め、「ただ人の中にはありがたし、内裏には中宮さぶらひたまふ…」夕霧が独身のうちに打診すべきだったという。

乳母も光をと言い、朱雀も同意する。主立った乳母の夫（弁）が六条院に仕えていた。乳母は弁に朱雀の意向を光に洩らしてほしいと頼む。弁は、

「方々につけて御陰に隠したまへる人（光の女君）、みなその人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはする。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ。（同上［五］）」

と、光と三宮との身分の釣り合いを強調する。乳母は、これを朱雀に報告し、更に

「御後見望みたまふ人々はあまたものしたまふめり。よく思しめし定めてこそよくはべらめ。…」

と言うと、朱雀は、「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり」と皇女の結婚の可否に触れ、「また高き際といへども…さるべき人に立ち後れて」と光よりも若い「ただ人」を肯定するかのようでもあり、更に、

「…親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしき人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきに

もあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるることなるを。…（同上［六］）」

と言う。女三宮の将来の予言めいてもいるが、低い。周りの女房達から、実話としてでも聞かされたことを朱雀がそのまま言っているのではないか。朱雀をとりまく人々の質が語られていると見るべきか。

朱雀の婿選びの基準が揺れて定まらない。おそらく、あの人この人の意見・忠告、女房達の男女関係の実話など、情報のすべてを、朱雀は、善意に取り上げるべきものとして受け入れ、その場その場の人の言いなりに対応し、ゆれて定まらないのではないか。物語は、周囲の人々が「いよいよわづらはしく思ひあへり」と語る。これは、朱雀の内意を得て話を進めると、朱雀は別の話に乗って、仲に入った人の立場が宙に浮き、女房などが苦しまなければならない情況に陥っていることを示唆する。現実には「御後見望みたまふ人々はあまたものしたまふめり（乳母の言葉）」と、複数の候補者が知られるに至っている。

朱雀の内心を物語は、まずは光、「さらで、よろしかるべき人」として、兵部卿宮、大納言の朝臣、右衛門督（柏木）「と、よろづに思しわづらひたり」と語る。

留意すべきは「あやしく、内々にのたまはする御ささめき言どもの、おのづから広ごりて、心を尽くす人々多かりけり（［六］）」とゴシップ沙汰になっていることである。

柏木の父太政大臣は、正妻（右大臣の四の君）から朧月夜を介して「よろづ限りなき言の葉を尽くして奏せさせ、御気色賜らせたまふ。（同上［七］）」と、すでに内意を得ているらしい。

兵部卿宮は「限りなく思し焦られたり」に至っている。

藤大納言は「御気色切に賜りたまふなるべし」である。

夕霧は光の使者として病気見舞いに行き、朱雀から直接水を向けられた（前述［五1］）。

朱雀があの人にもこの人にも気のある対応をしてしまっているらしい。

現代のような情報管理のない社会である。噂が噂を生むとなるとその責任が問われる。問われても〈ない〉という証明はできない。傷つく人、傷つけまいと神経をすり減らす人、贔屓の肩入れをして情報をリードする人…多様なゴシップのそれぞれについて虚実の見分けがそう簡単にできるものではない。ゴシップを収めなければならない。朱雀の決断が急務である。

［五3］（春宮の助言と光の辞退）情況を聞いた春宮から、父朱雀院に、

「さし当たりたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべきことなるを、よく思しめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」

との意向が示された。春宮の光への絶対的信頼である。光は、この春宮の立坊当初から、

「（光の）御宿直所は昔の淑景舎なり。梨壺に春宮おはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。（澪標［一〇］）」と、春宮に春宮教育を授けてきた。皇統の血を守る意識が感じ取れる。

春宮のアドバイスを得て決心のついた朱雀は、弁（乳母の夫）を通して光に内意を伝える。光は先が永くないことを理由に「内裏にこそ奉りたまはめ」と辞退した。これが光の真意であろうことは、後の語りであるが、「内裏にも御心ばへありて聞こえたまひけるほどに、かかる御定め（三宮を光にと決定したこと）を聞こしめして、思しとまりにけり（若菜上［一二］）」が語っている。冷泉をその気にさせたのは光であったであろう。三宮を入内させ、親代わりとしての後見を光がする腹であったと見る。

［五4］（光による三宮の後見承認）十二月に入る。婿選びの結論を得ないまま、朱雀は、女三宮の御裳着を盛大に挙行した。

「御腰結には、太政大臣を、かねてより聞こえさせたまへりければ、ことごとしくおはする人にて、参りにくく思しけれど、院の御言を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。（［九］）」

その三日後、朱雀院は出家する。三宮の相手の決定はなされないままである。

「すこし御心地よろしく」と聞いて光が見舞う。

光は「故院に後れたてまつりしころほひより…」と、まず故父桐壺院を朱雀に想起させようとする。朱雀は「いにしへ今の御物語、いと弱げに聞こえさせたまひて」と、故父院のことはイニシヘ（記憶ニ残ッテイナイ、アイマイナ過去）である。やがて、

「皇女たちをあまたうち棄てはべるなむ心苦しき。中にも、また思ひゆづる人なきをば、とりわきてうしろめたく見わづらひはべる。」

と始めるが、光に「内裏に」と言われているせいか、核心には触れない。光は

「げにただ人よりも、かかる筋は、私ざまの御後見なきは、口惜しげなるわざになむはべりける。…なほ、強ひて後の世の御疑ひ残るべくは、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき御あづかりを定めおかせたまふべきになむはべるなる。」

と一般論的に言うが、親替わりとしての後見役をという内意を父朱雀から光が授かってもという含みがある。

それを承けて、院は

「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王ひとり、とりわきてはぐくみ思して、さるべきよすがをも、御心

に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを。権中納言などの独りものしつるほどに、進み寄るべくこそありけれ、大臣に先ぜられ、ねたくおぼえはべる」と聞こえたまふ。

「中納言の朝臣、まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべくはべるを、何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも深き心にて後見きこえさせはべらんに、おはします御蔭にかはりておぼされじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやはべらむと疑わしき方のみなむ、心苦しくはべるべき」とうけひき申したまひつ。（〔一〇〕）」

光の「深き心にて後見きこえさせはべらん」により、ことが決着した。

朱雀が夕霧を望みながら、父光に対して婿にと言えないのは、太政大臣への遠慮である。朱雀は、太政大臣の娘雲居雁を夕霧の正妻の座から追い落として、父大臣の恨みをかうのを恐れている。同時に、光の助言「内裏に」も取り合わない。内裏には太政大臣の長女が女御として中宮に次ぐ立場にいる。夕霧のばあいと同様である。口では「さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへ」と言うが、夕霧も冷泉も朱雀自身によって封じられている。太政大臣の不快を極力回避したい朱雀である。

桐壺院が目指し、光が継承してきた《皇統の血の堅持》の意識が朱雀に微塵もないのは明らかである。女三宮は春宮の妹であり、朱雀の最愛の内親王である。藤氏にとっては政治的利用価値が高い。柏木一族にとっては、皇統の血を自家に入れるまたとないチャンスである。

光の決意を促したものとして、従来、女三宮の母が藤壺の妹であるという〈紫のゆかり〉とか、内親王に対する男の憧れとかが言われてきたが、決定的なのは、故桐壺院の遺言—光が朱雀の「御後見」を—であったのではないか。光の発語中の「後見」を軽視してはなるまい。政治上、朱雀の「御後見」として、今、光が守らなければならないのは《皇統の血

の堅持》である。太政大臣の嫡子柏木にも、藤大納言にも女三宮を譲ってはならない。太政大臣が衆目の見守る中、三宮の裳着の腰結役を務めた。彼が、それを既成事実として、朧月夜を介して、朱雀の説得に出るのは目に見えている。一刻の猶予も許されない。朱雀を今救うには、光は、個人的犠牲を払っても、この場で、女三宮の「御後見」を引受なければならない。それが故桐壺院の遺言を履行する唯一の道だと、光は腹を決めたのではないか。

薄雲巻の天変のさとしを光は「わづらはし」と受けとめていた。光だけでなく紫をも巻き込む新たな受難がはじまる。

［五5］（光の苦悩）三宮を六条院に迎えて三日の夜、光を送り出す準備をする紫の上を見ながら、光は

「などて、よろづのことありとも、また人を並べて見るべきぞ。あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし。若けれど中納言をばえ思しかけずなりぬめりしを」と、我ながらつらく思しつづけらるるに、涙ぐまれて…（若菜上［一四］）」

と、朱雀を拒否できなかった自己を内省する。「あだあだしく心弱くなりおきにける」は、相手の女性（三宮）に心を引かれもしないのに、朱雀を受け入れてしまったことを指し、「わが怠り」とは、その根底にある意識、即ち太政大臣を譲った光の現在の政治上の立場の弱さの自覚であり、現太政大臣に対する表立った争いを回避したい意識を言うか。朱雀批判の部分「中納言をば（朱雀が）え思しかけずなりぬめりしを」のエ…ズは太政大臣に対する朱雀の卑屈さに向けられた憤りであると同時に、夕霧の父光に対する朱雀の無礼さに対するそれでもある。メリシは光に重荷の総てをゆだねて自己満足していたあの夜の朱雀が光の記憶に鮮明によみがえっていることを示す。続く「我ながらつらく」であるが、ツラシは他者の仕打ちに対する心情を言う語である。このツラシは、三宮を紫の上位に正妻として据え、光に夫婦仲の犠牲を強いた朱雀に対する光の本音である。光がやむをえず自分から引き受けたことではあるが、太政大臣に対して働く遠慮が、光に対しては働かない朱雀である。朱雀に悪意はあるまい。光の能力のかいかぶりであったであろう。

帝朱雀は、弘徽殿・右大臣により、自分達臣下の意志が通るように、言い換えれば、聖帝桐壺の意志は無視し、弘徽殿一族―当面は妹四の君を正妻とする現太政大臣・朧月夜―の意向を大切にし、自分では何一つ決断できないように育てられた帝である。その意味で臣下によって犠牲にされた気の毒な存在であると言えよう。

〔注〕

(1) 望月郁子『源氏物語は読めているのか―末世における皇統の血の堅持と女人往生』第一部第一章～第三章　笠間書院　二〇〇二年六月刊

(2) 注1の文献の第一部第三章

(3) 夜居の僧都に出生の秘密を知らされた冷泉は、譲位時までに男皇子に恵まれなかった。光はそれを「思ひ悩ましき御事なくて過ごしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世（若菜下〔七〕）」と、「口惜しくさうざうしく」思う。

光自身については、薫の誕生に際し、「…さもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなり。この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや（柏木〔三〕）と、光は思っている。

(4) 以上の部分は筆者の解釈である。一般には「今」と重複させて説かれている。